

休息時はアルファオスだけが特定メスとの結合が見られ、他2頭のオトナオスはアルファオスとの結び付きがみられたが、メスとの間の結合は全く見られなかった。

小さな群れの個体間の結び付きについて言及しようとしたが、特定の強い結び付きが、一般化できるものなのか、あるいはその個体間の特別なものなのか10頭以下の小さな構成員よりなる群れだけに、本研究だけでは多くのことを語ることはできないので、さらに、小さな群れの個体間の結び付きに付いて調査を継続していきたい。

自由 : 32

ニホンザルの母親と成長した息子の社会関係

五百部 裕 (京都大・霊長研)

本研究では、社会交渉の分析を通してニホンザルの母親と成長した息子の社会関係を明らかにすることを目的とした。父系的社会を持つ霊長類種では、母親と成長した息子の間で様々な社会交渉が交わされる。特にボノボでは、集団内の母親の存在が息子と他のオスとの間の社会関係に大きな影響を与えることが明らかになっている。一方、母系的社会を持つニホンザルなどでは、オスは出自群を離れ、その時点で母親と息子の結びつきは切れてしまう。しかし、特殊な条件下(島や餌付けなど)では、母系的社会を持つ霊長類種においても、出自群を離脱しないオスや一度出自群を離れてもその群れに戻ってくるオスが存在する。こうした条件下での母親と成長した息子の間の社会関係を検討することは、たとえ特殊な条件下であっても、霊長類の母・息子関係の一般像を明らかにする上で必要であると考えられる。

こうした目的を達成するために、宮崎県幸島の群れを調査した。幸島は島という閉鎖された環境のため、オスは一度出自群を離れてもその群れに戻ってくる可能性が大きい。また、幸島では餌付けを縮小した後個体の成長が遅くなり、その結果オスが群れを離脱する年齢が遅れる傾向にある。

現地調査は1991年7月30日～8月6日と1992年3月3日～3月13日の2回行った。夏期の調査では、個体識別の再確認と予備的な資料収集を行った。一方、3月の調査では、群れ離脱前の5才以上のオスのコドモ4頭とその母親4頭を個体追跡した。個体追跡中には、追跡個体が関わった社会

交渉や近接個体に関する資料を収集した。こうした資料は現在分析中であるが、以下に予備的な分析の結果を記す。1) 母親と息子の間の近接の度合やグルーミングの頻度は、ペアによってかなりのばらつきが認められた。2) 近接の度合やグルーミングの頻度と母親の順位や息子の年齢の間に関係は認められなかった。3) 息子が発した敵対的交渉に母親が介入することはなかった。今後は、この資料の分析を進めるとともに、さらに資料を増やして、ニホンザルの母親と成長した息子の社会関係を明らかにしていきたい。

自由 : 33

ニホンザルのテレメーターによる行動パターンの解析

東 英生 (野生動物保護管理事務所)

ニホンザルの野外調査において電波発信機を利用することによって、色々な知見が得られている。欧米諸国では、直接観察の困難な、野外での野生哺乳類等への調査で、早くから電波発信機を利用し、装着個体の位置を確認するだけではなく、行動パターンを解析する試みや、送られて来る電波から装着個体の生死の確認、生理学的な情報等を記録することによって多くの成果をあげている。

そこで本研究では、野外でのニホンザルの調査において、テレメーター利用の可能性を検証するために、ノーマルタイプの発信機と、電波発信機の急激な動きによって発信電波の波形パターンが変化するもの(モーションセンサー付き発信機)を一つの首輪に包埋し、両方の機能をもつ発信機を放飼場の個体に装着した。装着による、個体の反応を観察した後に、放飼場に設置してあるリモートコントロール付きテレビカメラを用いて観察を続けると同時に、装着した発信機から送られて来る電波の変化を記録した。受信機を通して記録計に描かれる波形と、受診した発信音、モニターテレビの画面の3つをビデオカメラで一つの画面に撮影し、記録した。それによって受信された波形のパターンと装着個体の実際の行動パターンとの対応を検討した。モーションセンサー付きの発信機は製品によって感度に差があった。ノーマルタイプ、モーションセンサー付きのどちらの発信機でも、静止状態を波形から読み取ることは可能であるが、行動パターンと波形のパターンには明ら